

マンドリニストの犯罪

＝マンドリン・ギター界の社会システム論的考察＝

本井 理

◆第3章 「マンドリン・ギター音楽」、その狂気の実態

序文でも述べたとおり、本小論はマンドリン・ギター音楽が二十一世紀においても生き残り（社会的に認知され）、芸術として評価を得るために、その阻害要因となっているマンドリン・ギター社会の病理的な社会構造を分析し、構造改革についての論議の端緒を提供することを目的としています。

マンドリン・ギター社会の社会構造が病んでいることは、前章（第2章「病理社会に棲息する病的な人々」）で例示した数々のうんざりするような社会病理現象の存在によって明確になったかと思いますが、議論を次のステップに進めるに当たっての最大の障害となっているのは、大半のマンドリン・ギター奏者が「自分たちがやっていることは音楽（芸術）である」と信じきっていることです。このようなおめでたい人々が「斯界の社会構造を改革しなければ、マンドリン・ギター音楽は二十一世紀に生き残ることができない」という危機意識など持つはずがありません。最初にはっきりさせておかなければならないのは、日常、私たちが演奏し、耳にしている「マンドリン・ギター音楽」なるものは、独奏であれ合奏であれ、（マンドリン・ギター音楽以外の）音楽専門家からすると論評の対象外であり、そもそも存在自体が認識されていないに等しい状況にあるという厳しい現実です。そればかりか、一般の音楽愛好者からも「聴いていて不愉快なもの」「カタルシスの感じられないもの」として見放されつつあるというのが、偽らざる客観的な評価であると思われま

す。

この見解に異論のある方は、各種音楽事典でマンドリンに関する記述を当たってみたり、中学校や高等学校の音楽教員に代表的なマンドリン・オリジナル曲の曲名や作曲者を知っているか尋ねてみたり、レコード店にマンドリン・ギター音楽のCDのコーナーがあるかなどについて、ご自分の目と耳で確認してみることをお勧めします。マンドリン・ギター音楽が音楽（芸術）として評価を受け、社会的に認知されているならば、もっとメジャーな存在であってしかるべきではないでしょうか。

こうした見解に接した際のマンドリン・ギター関係者の反応は、大まかに次の四タイプに分かれます。

もっとも多いのは、自分たちが弾いて楽しんでいるのだから「音楽として云々」などと

いわれるのは筋違い、あるいは迷惑だという反応。

次に多いのは、壮年層を中心にみられる「マンドリン・ギター音楽には（経験者にしか理解できない）特殊性がある」と同じ音楽の世界の中にダブルスタンダードを設け、「部外者」からの論評は聞く耳を持たないという反応。

そして、最近、若手奏者を中心に増えているのが、自分が演奏テクニックに長けている、あるいは（マンドリン・ギター音楽以外の）プロの音楽家に師事した（実際は「師事した」というか単に面識があるだけのことが多い）ことなどを免罪符として批判の対象には該当しないと反発する反応。

最後に、ごく少数ながら、上述のような見解を全面的に受け入れ、主張者の「信者」になってしまう反応があります。

本章では、このように自分の考え方や音楽的理念をまったく持たない人々、あるいは自分と異なる意見には一切耳を貸さない頑迷な人々に対し、なぜ「マンドリン・ギター音楽」（音楽の範疇に入っていないという意味で、表題では敢えて「」で括りました）が音楽と呼ぶに値しないかについて論証したいと思います。

【I】 楽器モドキを製作・販売する悪徳業者

マンドリン・ギター音楽は、リズム、メロディー、ハーモニーといった音楽（西洋古典音楽）の評価尺度を適用する以前の段階で、すでに致命的な欠陥を抱えています。それは、マンドリン属には、正確な音程で発音できる楽器が最初から存在しないということです。

「まさか」と思われる方は、ご自分の楽器をチューニングメーターで計測し（ギター用のピック・アップ・マイクを用いるとよい）、各弦の開放時の実音、1オクターヴ上の実音およびハーモニクスの3音の音程が全弦にわたって正確に合致するかどうか確認してみてください。たとえ、ブリッジの位置を調整して一時的に合わせることができたとしても、再度計測した際も正確に音程が合致する楽器というのは、残念ながら、現状では、まず見当たりません。

正しい音程で発音することは楽器の演奏の基本中の基本であり、音程が不正確な演奏がいかに聴き苦しいかはヴァイオリン教室の発表会や吹奏楽コンクールの予選などを聴いてみると明確に実感できます。中学校や高等学校の課外部活動などで初心者を集めて管弦楽団や吹奏楽団を組織する際も、指導者の第一の注意は正しい音程で発音できるように育成することに払われますし、大人数による三味線や大正琴の合奏が何となく滑稽に聴こえるのも、正確な音程が取れないからなのです。

しかし、大半のマンドリン奏者は、チューニングの重要性についての認識が足りないようで、上述のようなお粗末きわまりない楽器事情について懸念を表明したり、原因究明に

取り組んでいるという方は、寡聞にして知りません。そうした奏者の無頓着もあって、マンドリン・ギター演奏のチューニングのレベルは年々悪化の一途をたどっていますが、聴衆に正確な音程で発音できない楽器の演奏を聴かせるのは、第二次大戦中にナチスドイツの秘密警察が中心からやや外れた位置に穴を空けたレコードを聞かせて囚人を苦しめたのと同様、芸術というよりは拷問の範疇に属する行為だといえます。

さらに、聴衆の不快感をつのらせているのが、プレクトラムの擦過音（ピックが弦に当たる際に生じる「カタカタ」「パタパタ」「ポコポコ」音）です。擦過音の発生は撥弦楽器の宿命ではありますが、基本的に楽曲構築には不必要な要素であり、音量的に「擦過音<余韻」という不等式が成立していなければ、演奏としては評価に値しないでしょう。

また、余韻の乏しさは擦過音を目立たせるほかにも、ポジションが上がるにともなって音質のこもりが顕著になるという弊害ももたらしています。

不正確な音程や余韻の乏しさに加え、低音楽器には「ビチビチ」「ジリジリ」「ドロドロ」といった異常振動の発生もみられますが、いずれにしても「狂った音程で奇怪な擦過音や振動音を発する演奏」というのは、音楽としては論評の対象外だといわざるを得ません。

このような不正確な音程、余韻の欠如、異常振動の発生の根本的な原因は、楽器自体の構造的な欠陥にあるのです。大枚数十万円をはたいて購入した自分の愛器が、実は玩具にも等しい楽器モドキに過ぎなかったということを認めるのは、さぞかし辛いことと思いますが、以下のような楽器は、最初から「欠陥商品」だったと疑うべきでしょう。

- ①木製の楽器で湿気を嫌うはずなのに、ボディの内部に吸湿性に富んだ紙が張り込んである（ヴァイオリンやギターには内部に紙の張り込んである楽器などない）
- ②ネックとブリッジで骨棒の溝切り間隔が異なっていて、弦を平行に張ることができない
- ③買った当初は澄んだ音色でよく鳴っていたが、1年も経たないうちにボケてこもった音色に変わって音量も出なくなり、以後、状態が元に戻らない
- ④外見上の損傷は認められず新品同様に光輝いているが、何年弾き込んでも鳴らない
- ⑤ネックがジャンプ台のように反り返って弦高が上がり、押弦が困難になっている
- ⑥不調のため販売店に持ち込んだところ、指板の交換が必要といわれ、多額の修理費を要した
- ⑦ヘッドとネック、ネックとボディ、表面板とピックガードなどの接合部に接着剥離の兆候がみられる

以上の要件に該当する楽器が欠陥商品だとすると「何だ、全部じゃないか」という声があがりそうですが、まさに、そのとおり。現在、出回っているクワルティーノからマンドローネまで、ほとんどすべてのマンドリン属は、国産か舶来か、手工品か量産品か、新作か古楽器か、あるいはメーカーや価格の如何を問わず、楽器モドキのイカモノばかりといっても過言ではなく、マンドリン・ギター音楽衰退の根本原因として強く警鐘を鳴らした

いと思うのです。

当然のことながら、消費者には自動車や住宅の場合と同様、無償の調整・修理、場合によっては返品・交換を求める権利があります。また、このような欠陥商品を製作・販売して垂れ流し、暴利を貪っている悪徳業者に対しては、PL法に基づいて関係機関に告訴するなどの法的手段を採ることも含め、徹底的に追及し、市場から追放して行かなければならないでしょう。

ただし、悪徳業者が野放しになっているのは、音楽に対する意識や感性が欠如したユーザーの側に主たる責任があるということを忘れてはなりません。

第一に、ほとんどの奏者はマンドリン属の発音原理と構造に関する知識が欠如しており、そもそも「マンドリンはなぜ鳴るのか」といった素朴な疑問すら懐こうとしません。

第二に、そのような非科学的・非論理的思考回路の持ち主は先輩の経験談や、バックマージンに釣られた指導者のセールス誘導トークなど、根拠のない妄言を信じやすく、「ブランド信仰」「価格信仰」あるいはデザイン重視によって楽器を購入することとなりがちです。

第三に、市場の原理からすると、本来は厳しい姿勢で対決すべき関係にあるはずの製作者や販売店を自分たちの仲間・味方と信じ込み、あまつさえ彼らを「先生」などと呼んで指導を仰いでいるような「甘えの構造」「癒着の構造」があります。

以下、この三つの視点から問題の核心に迫りたいと思います。

(a) マンドリン属の発音メカニズムと構造上の欠陥

おそらく、ほとんどの読者の皆さんは、突然「お前の楽器は欠陥商品だ」といわれても、構造上、どこに不備があるのかが理解できないことと思います。そのためには、最初にマンドリン属の発音原理から説明しなければなりません。

撥弦楽器は物理的にみると、ギターに代表されるように、①指あるいはピックが弦に衝撃を与え、②弦の運動をブリッジが表面板に伝達し、③共鳴箱の内部の空気が振動する、という発音メカニズムが基本になっています。マンドリン属は、それに加えて、③' 表面板がブリッジの圧力に抗して押し上げようと反発しながらボディへ振動を伝達し、④全体が共鳴する、という発音メカニズムを採る楽器があり、それぞれ音色や遠達感など特性が異なります。このほか、表面板にプラスチックをコーティングするなど、製作者が共鳴を減衰させる創意工夫(?)をほどこした結果、発音メカニズムが基本的なパターンから懸け離れている楽器も見受けられます。

このうち①については奏法やピックの材質、弦の品質などに帰着すべき問題であり、②以下が楽器の構造上の問題となりますが、これまで斯界では、①に属する問題ばかりが論じられてきたように思われます。

さて、発音メカニズムが①→②→③、①→②→③' →④のいずれであっても、表面板が

重要な役割を果たしていることは間違いありませんが、現在、演奏に供されている楽器の大半は表面板に何らかの欠陥が認められます。いい換えると、表面板だけに限ってみても、「欠陥商品」との誹りを免れないのがマンドリン属の現状なのです。

第一に、マンドリン属の表面板に多用されているスプルースですが、近年、市場に出回っている楽器では量産品はもとより、手工品でも大半で厚さ4mm前後にスライスされたギター用の材料がそのまま安易に用いられている点に問題が認められます。

弦長650mmのギターの全弦の張力は約60kgであるのに対して、マンドリンの場合、張力は140kg以上となりますが、表面板の面積が小さいため、剛性を考慮すると、一見、問題がないような錯覚に陥りがちです。しかし、ギターでは押弦を容易にするため弦長を630～640mmとし、張力を45kgに下げた楽器でさえトラブルが頻発しているのです。

もちろん、表面板の裏側に力木を入れて補強を施してはありますが、押弦や弾弦でさらに強い圧力が加わるので、薄くて華奢な表面板では疲労が早く、変形し、やがては陥没に至ります。特に、力があり余っている学生奏者の場合、奏法の未熟やメンテナンス知識の欠如とも相俟って、新品の楽器の表面板を半年も経たないうちに陥没させてしまうケースが珍しくありません。

表面板の薄い楽器は薄皮を張った太鼓のようなもので、購入した当初は豊かな音量で鳴りますが、表面板が陥没するなどして運動能力が衰えると、皮のゆるんだ太鼓が鳴らなくなるのと同様、鳴らなくなってしまう。これが本節の冒頭であげた「買った当初は澄んだ音色でよく鳴っていたが、1年も経たないうちにボケてこもった音色に変わって音量も出なくなり、以後、状態が元に戻らない」原因にほかなりません。

なお、表面板の厚みを知るにはサウンドホールの部分で計ってみるしかありませんが、実際はピックガードやサウンドホール周囲の当て木細工の厚みが判別を難しくしています。それにもかかわらず、各メーカーのカタログなどには表面板の材質と厚みが明示されていません。

だからといって、表面板をそのまま分厚くしただけでは一般に振動効率が落ち、鳴らない楽器になってしまうのも、また事実です。強度を保つためにプラスチックをコーティングした楽器が鳴らないのも振動が減衰するためで、これが同じく冒頭であげた「外見上の損傷は認められず新品同様に光輝いているが、何年弾き込んでも鳴らない」原因です。

表面板をほどよく振動させ、かつ圧力耐性も持たせる工夫は、19世紀後半から今世紀初頭にかけてイタリアで生まれました。それは、表面板にもっとも力のかかるブリッジの直下に角度の深い折り山を設け、かつ折り山部分で表面板の横幅を大きく膨らませた形状とすることでした。原理としては橋脚やテレビ塔の構造を思い浮かべていただくのが分かりやすいのですが、典型的な例は今日まで銘器として名を残している「カラーチェ」でしょう。

逆にいうと、折り山がブリッジの直下になく、あってもほんの申し訳程度にしか付けられていない楽器は折り山が本来の機能を果たしておらず、また、ブリッジ直下に角度の深い折り山があっても表面板の横幅に膨みを持たせていない形状では、陥没は防げないということです。

近年、市場に出回っているマンドリンをみる限り、国産品も舶来品も、また、量産品も手工品も表面板が薄い上に、折り山の角度が浅くて平板に近い楽器が大半を占めているのが現状です。「カラーチェ」ブランドで市販されている楽器も表面板はフラットに近く、ラファエレ・カラーチェ（1863～1934）が製作した深い角度の折り山を持ち、その部分で表面板の横幅に大きな膨らみを持たせた往年の作品（「マンドリンの音の博物館」などで実物を見ることが出来る）とは似ても似つかない代物であって、耐久性の点では比較にならないことが容易に推測できます。

もちろん、両者は構造だけではなく発音メカニズムも大きく異なっています。（以下、執筆中：続く）